

比較家族史学会春季大会シンポジウム『系図と継承』

第Ⅱ部『系図が語る世界史を超えて』

第2セッション「近世日本（旧上田藩上塩尻村）」

於静岡大学静岡キャンパス人文 E201

「家系の継承と家業の継承—上塩尻村原与左衛門家を事例として—」

京都産業大学 山内太

はじめに

本報告の課題：家系図から見えてくる家の継承を、家業の継承という側面から見直す。

前提：18世紀半ば以降日本各地で拡大した市場経済化の波の存在

家名・家業・家産・家格を持つ百姓身分の「家」という家族集団の誕生

家継承の困難さとそのための試み

→養子……………能力と個性

家業経営……複合生業（安室 2012、玉 2020、国立民俗博物館 2008 他）

新しい百姓像（平野 2016、木下 2018 他）

家系継承にあたっての家業展開・変化の関係を注視。家系間の繋がりにも着目。
経営組織としての百姓身分の「家」継承戦略。

事例：信州小県郡上塩尻村（長谷部 2022）

→18世紀半ば以降、蚕種商い活動が盛んとなる。

原一族の本家与左衛門家を取り上げる。

→今のところ幕末明治期に自ら作成した、同家・同一族の家系図類は未確認。

庄屋文書や他家作成家系図を基に、報告者が作成した家系図を用いて

本報告を組み立てる。

1. 原一族について¹

本家：与左衛門家（17世紀中頃に上塩尻村に来村）

分家：17世紀後半に惣兵衛家、利兵衛家、儀兵衛家の三家を輩出

18世紀初頭に又右衛門家、18世紀末に太左衛門家を分家

孫分家：18～19世紀前半にかけて、分家から分家が輩出。

→同族団を形成

¹ 詳しくは、長谷部 2022 第6章4節を参照して欲しい。

2. 与左衛門家の18世紀から19世紀(20年代頃迄)と家業

- ・18世紀前半：蚕種商いに進出(4代与左衛門か?)²
 - 5代金五郎与左衛門(儀兵衛家からの養子)も、当初蚕種商いに従事³
- ・明和五(1768)年に若くして庄屋役に就任
 - その後、寛政五(1793)年~十(1798)年を除き、文政八(1825)年迄⁴。
 - その他、割番役や他村庄屋役を兼帯する。
 - 頻発する村内外の諸問題に対応⁵。
 - ：地域名望家へ
- ・18世紀後半：本家は、蚕種商いに消極的。
 - 地主化(所有貫高増。18世紀末には村一番の大貫高所持者に)(図1参照)
 - 在地商人化(米麦、雑穀、蚕種、真綿、麻、水油等々の在地での商い)⁶
- ・6代馬之丞も、寛政九(1797)年(添役)から文政八(1825)年まで庄屋を勤める。
 - 同時に親子で上塩尻村庄屋を勤める。
 - 文政八(1825)年以降、天保七(1836)年迄他村庄屋兼帯
 - ：家業の転換? 行政担当者化?

3. 儀兵衛家の蚕種商いと其の継承—18世紀から19世紀⁷

- ・儀兵衛家(金五郎実家)の急速な事業拡大=源十郎(金五郎与左衛門甥)一代にて
 - 本家との深い繋がりを保ちつつ発展。新規お得意さん開拓(特に北上州・沼田領)
- ・源十郎蚕種商い集団
 - 代理人：熊太郎(源十郎長男)、
 - 伝兵衛(一族太左衛門次男、源十郎養子、分家)
 - 茂兵衛(塚田与右衛門家、原本家より養子、源十郎従弟)
 - 非血縁者、地域有力者
 - 共同事業者

² 清水助五郎家文書「萬願書並御注進書控帳」各年次より

³ 同上より

⁴ 馬場家文書200・201「天正ヨリノ記録」、並びに佐藤隆一家文書「貫文五人組名前帳」より

⁵ 例えば「在町商物一件」や山論、塩崎一件、馬入道一件、あるいは飢饉、災害等々諸問題が頻発していた。「在町商物一件」については、長谷部2022第1章第1節を、山論については上田市誌編纂委員会2003を、塩崎一件については塩崎村史編集委員会1971を、馬入道一件については、長谷部2009第3章第1節を参照して欲しい。

⁶ 原家文書120-1「大福帳」、120-2「書出帳」、120-3「萬覚帳」、94「萬日記」より

⁷ 詳しくは、長谷部2022第2章第3節を参照して欲しい。

- ・文政期(1920年代)後半における源十郎蚕種商い集団の解体・継承
 - ：熊太郎(改名源十郎)、伝兵衛(分家、中屋屋号の継承)の独立

- ・天保期以降の儀兵衛家の蚕種商い
 - ：天保末期(1840年代前半)に熊太郎は蚕種商いから撤退
 - ：嘉永期中(1850年代前半)に伝兵衛家蚕種商い終了
 - 安政二(1855)年に伝兵衛死去

 - ：儀兵衛家蚕種商いは継承されず。
 - 残された儀兵衛家の人々⁸(嘉永二(1849)年初代源十郎死亡)
 - ・堅次(源十郎次男熊太郎弟)
 - ：泰助下代。嘉永三(1850)年力石村・市郎右衛門婿養子に出る。
 - ・量平(伝兵衛長男)
 - ：始め伝兵衛と商い、その後泰助養子となる。
 - ・邦平(伝兵衛次男)
 - ：幼少期に塚田茂兵衛養子に出される。
 - ・惣藏(伝兵衛三男)
 - ：伝兵衛蚕種商い終了後、泰助下代となる。

4. 文政期以降の与左衛門家の継承と家業

- ・頻繁な養子の入れ替え⁹
 - ：文政期に泰助(初代太左衛門四男)が養子に入る。
 - 天保三(1832)年、泰助実家に戻される。彦助(初代太左衛門孫)が養子に入る。
 - 天保八(1837)年、彦助が実家に戻される。
 - 天保十(1839)年、泰助が再び馬之丞の養子となり、与左衛門を名乗る。
- ・泰助の蚕種商い
 - ：文政期以降、儀兵衛家や本家と繋がりながら、独自に蚕種商いを拡大¹⁰。
 - 蚕種仕入れ先や販売先が、儀兵衛家のそれとは異なる¹¹。
 - 特に販売先は上塩尻村蚕種商人の中でも特殊(越後・中越地方)
 - ：儀兵衛家メンバーを取り込みながら継続

⁸ 佐藤嘉三郎家文書蚕種 48「御鑑札請書」、49「蚕種商人名前帳」、77「蚕種売員数取調帳」、81「蚕種商人名前帳」、83「塩尻西組蚕種取調帳」より。

⁹ 佐藤嘉三郎家文書 I「宗門御改帳」各年次より

¹⁰ 原家文書 120-4「日用録」

¹¹ 佐藤嘉三郎家文書蚕種 50「上塩尻村蚕種仕入高取調帳」、64「上塩尻村種売蚕種帳」、68「上塩尻村種売蚕種帳」、73「上塩尻村種売蚕種取調帳」

- ・ 文政・天保期（1820年代～40年代前半）の与左衛門家
 - ： 所有貫高が急減から回復（図1参照）
 - ： 助は村役人には就任せず。
 - 与左衛門家立て直しの必要性？
 - 本家家業・蚕種商いの立て直し
 - 与左衛門家における家業としての蚕種商いの再興

- ・ 嘉永・安政期（1850年代～）の与左衛門家
 - ： 所有貫高の安定（図1参照）
 - ： 嘉永六(1853)年、伝兵衛長子量平が泰助与左衛門の養子となる¹²。
 - ： 安政四(1857)年、量平家長となる。
 - 5年後、与左衛門を襲名。
 - ： 同年、量平が上塩尻村庄屋となる（明治2（1869）年迄）

 - ： 安政四（1857）年時以降の与左衛門家の蚕種商い¹³
 - 与左衛門（初代泰助/下代惣藏）
 - 二代目泰助（初代泰助与左衛門の兄の子、初代泰助養子）
 - ↓
 - 与左衛門は蚕種商い規模を大幅に縮小
 - 二代目泰助は蚕種商いから撤退。元治2（1865）年泰助が村から退出。

 - ： 再び蚕種商いから村行政へ

終わりに

家系継承戦略：家業の変化（養子等個人の移動・個性）
 ← 血筋の持つ意義。多様な生業の存在と複合生業
 家系を超えた、家系をまたぐ家業経営・組織
 家系間の関係性の重要性（同族をも超える）。

▣ 家系図を通して見える家継承への熱意

¹² 佐藤嘉三郎家文書 I 742 「宗門御改帳」

¹³ 佐藤嘉三郎家文書蚕種 77 「蚕種売員数取調帳」

参考文献一覧

安室知『日本民俗生業論』慶友社 2012 年

上田市誌編纂委員会『上田市誌 歴史編(9) 近世の農民生活騒動』(上田市誌刊行会 2003 年)

国立民俗博物館編『生業から見る日本史』吉川弘文館 2008 年

木下光生「村・小農・農業の長期史」『新しい歴史学のために』293号 2018 年

木下光生『貧困と自己責任の近世日本史』人文書院 2017 年

佐野静『中近世の生業と里湖の環境史』吉川弘文館 2017 年

塩崎村史編集委員会『塩崎村史』(塩崎村史刊行会 1971 年)

白水智『中近世山村の生業と社会』吉川弘文館 2018 年

高橋美貴『近世・近代の水産資源と生業』吉川弘文館 2013 年

玉真之介「日本の兼業農家」『村落社会研究ジャーナル』27 巻 1 号 2020 年

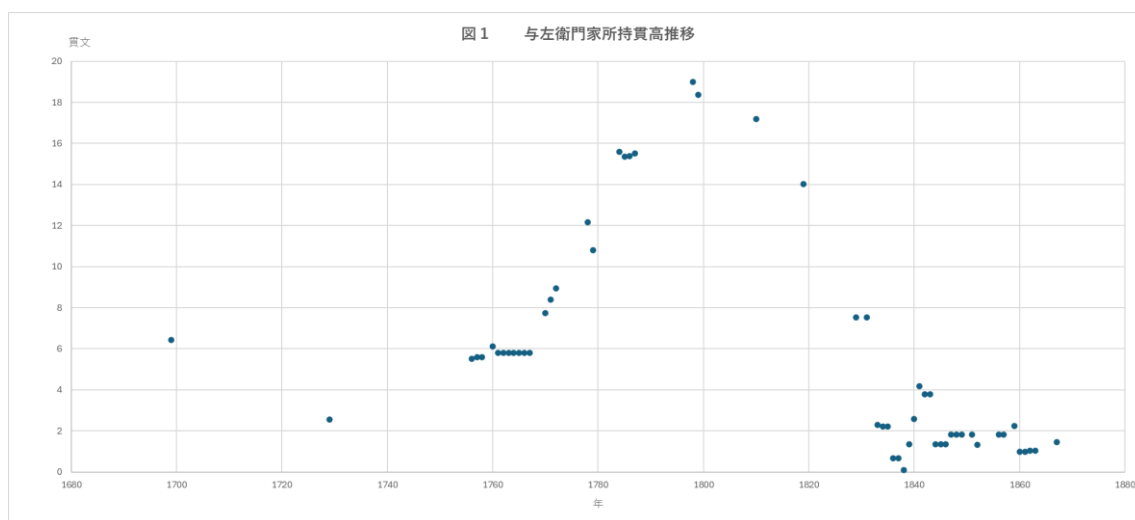
橋本道範『中世における水辺の環境と生業』思文閣出版 2015 年

長谷部弘・高橋基泰・山内太編『近世日本における市場経済化と共同性』(刀水書房 2022 年)

長谷部弘他編著『近世日本の地域社会と共同性』(刀水書房 2009 年)

春田直紀『日本中世生業史研究』岩波書店 2018 年

平野哲也「近世村落における百姓の生業選択」『新しい歴史学のために』289号 2016 年



出所：佐藤嘉三郎家文書並びに原家文書「貫高初名寄帳」各年次より

